

心理学から見る、令和の若者の結婚観 未婚率の増加が止まらないワケ



＜提言者＞ 永久ひさ子（文京学院大学人間学部心理学科 教授）

心理学が専門。研究テーマは、家族の変化と社会文化的要因の関連（社会文化的変動と結婚・子どもをもつ価値の変化、晩婚化・未婚化・少子化）。日本心理学会、日本発達心理学会、日本家族心理学会、日本心理臨床学会に所属。本学の心理臨床・福祉センター「ほっと」センター長。主な著書に『家族心理学』（共編 保育出版社、2017年）、『人口の心理学へー少子高齢化社会の命と心ー』（共著 ちとせプレス、2016年）、『結婚と家族の心理学』（共著 柏木恵子（編）ミネルヴァ書房、1998年）、『夫と妻の生涯発達心理学ー関係性の危機と成熟ー』（共著 宇都宮博・神谷哲司（編著）福村出版、2016年）

◆はじめに

令和元年の平均初婚年齢は男性31.2歳、女性29.6歳に上昇し「一生結婚するつもりはない」未婚者（18～34歳）の割合は、男性17.3%、女性14.6%と、過去最高に達しています。一方、「いずれ結婚するつもり」の未婚者は減少傾向ながらも、男性81.4%、女性84.3%と依然高い水準にあります。*

恋愛や結婚に積極的ではない男性を指す“草食系男子”という言葉が聞いて久しいですが、いずれの回答にも男女の顕著な差はなく、若者の結婚観をその言葉でくくることには疑問符が付きそうです。とはいえ、「何が何でも結婚したい」と答える若者は減少し「結婚してもしなくても、どちらでもいい」と考える人が増えています。私自身も学生と接するなかで感じています。いまや、結婚「する」「しない」は個人の選択で、生き方の問題として捉えられるようになってきました。

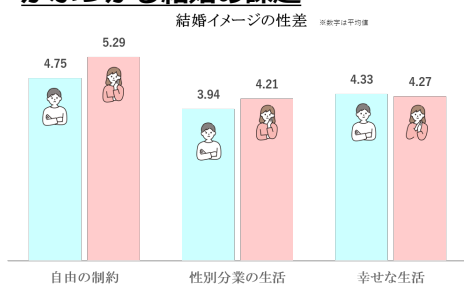
このレターでは、こうした未婚者の結婚観や結婚行動の変化について、私の最新の調査結果をもとに紹介します。

◆3つのイメージから探る、若者の結婚観

ことし2月、全国の25～39歳の未婚者960名を対象に、結婚のイメージに関する調査を行いました。その結果、結婚のイメージはプラスの側面である「幸せな生活」、経済的・心理的な制約が生まれるというマイナス面の「自由の制約」、そして、男性は稼ぎ手、女性は家事育児の担い手の責任が期待されるという「性別分業」の3つに分類ができました。

これらを比較したとき、高い平均値を示したのは、「自由の制約」です。

◆自分の足で幸せな人生を歩む女性 がぶつかる結婚の課題



*「1全く当てはまらない“から”7よく当てはまる”までの7件法で尋ねた

女性は「自由の制約」「性別分業」の平均値が高く、男性以上に、結婚を大変なものにとらえています。

また結婚意欲を分析したところ、男女とも、結婚をできればしたい、絶対したいと積極的な人は6割程度で、4割の人は、するつもりはない、したくない、どちらでもいい、と消極的でした。日ごろ学生と接する中での感触を裏付ける結果といえます。

その昔、「適齢期がくれば、結婚するのが当たり前」と考えていた時代には多少のことがあっても「結婚すること」が優先されました。しかし、「する」か「しない」かを選べる時代になると、自分にとってどんな生き方が幸せなのかを、よく考えるようになります。その結果、結婚しても大変さが勝ると考えれば、「どうしても結婚したいほどでもない」と思い至るのは自然なことと言えます。

これまで、人々がこぞって結婚してきたのには、女性にはまともな職が少なく、一人で食べていくのが大変、男性は家事ができないし、家やお墓を継ぐのには子どもが必要だった、という背景があります。しかし現代は、女性もしっかりとした職に就くことができ、経済的に男性に依存する必要がありません。便利な家電製品の登場で家事は簡単、デパ地下やコンビ

ニの登場でご飯も困らなくなると、男女とも結婚の必要性が薄くなったのです。

しかし一方で、結婚生活の中身はあまり変わっていません。イクメンが増えても、子どもの病気で仕事を休むのは女性が多いし、夫の転勤についていくには女性がキャリアを諦めることになります。

“婚活”の言葉の生みの親である、社会学者の山田昌弘先生は、女性の結婚を「生まれ変わるようなもの」と、言います。女性は結婚した相手によって、人生も変わることを指したのですが、私の研究では専門的な仕事に就く女性ほど、「いかに自分の人生を変えずに生きていくか」を重視する傾向にあります。

彼女らは小さい頃から勉強に励み、大学、大学院と進み、資格を取り、現場に出てキャリアを築きます。これを結婚や子育てによって手放したり、中断したりすることは大きな決断です。一方で、専門的な仕事にやりがいを感じていても、かつて子育て専業の母親がやってくれたように、自分も子どもに手をかけて育てたいと考えるなど子育ては変えたくない女性が多いのです。

その妥協点として、「資格を取って、2、3年経験を積んだ後なら子育てで休んでも大丈夫。結婚と子どもはそれから」と考えると、あつという間に30歳近くになってしまいます。

◆「結婚によって生き方を縛られたくない」男性は結婚意欲が徐々に低下

女性は何の年代でも結婚に対するイメージは変わらないのですが、男性は年齢が上がるにつれ、「自由の制約」のイメージが強くなり、「幸せな結婚」のイメージが弱くなり、結婚に対して悲観的になることが明らかになりました。この要因として2つのことが考えられます。

【出展】
*人口統計資料集・2021年・国立社会保障・人口問題研究所

1つは、年齢が上がるにつれ、「この給料で家族を養えるのか」「趣味など自由に使えるお金がなくなる」「自由気ままな生活ができなくなる」といった責任や不安が強くなるためです。例えば、最近では新卒入社した会社を転職し、その後も転職を繰り返す人は少なくありません。しかし、結婚によって家族への責任ができる、転職にためらいが生まれます。

また、年齢が上がり、周囲に既婚者が増えれば、結婚の現実を聞く機会が増えるでしょう。離婚率が高い昨今では、身近な人の離婚話も聞こえてくるかもしれません。それは「幸せもあるだろうけど、大変だな」「自由がなくなる」というイメージを強めることになるでしょう。

一方で、晩婚化が進み、独身でも十分に楽しく生活できるようになりました。最近では「おひとり様」という言葉が生まれるほどです。このような社会の変化が、男女を問わず、結婚はしてもいいし、しなくてもいい、という生き方の変化につながっていると思います。してもしなくてもいい結婚になると、自分のお金や、時間という有限の個人的資源を自分のために使える自由の制約以上に結婚が魅力的でなければ結婚しなくていい、と思うようになるのも不思議ではありません。それが、結婚意欲が低下する背景だと考えられます。

◆「いずれ結婚するつもり」。その「いずれ」は待っていても来ない

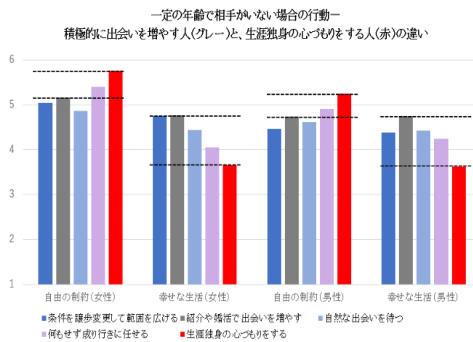
本調査では、「一定の年齢で適当な相手がいらない場合、どうするか」という項目を用意し、結婚活動への態度を尋ねています。

ここでは、

- ①条件を譲歩変更して範囲を広げる
- ②紹介や婚活で出会いを増やす
- ③自然な出会いを待つ
- ④何もせず成り行きに任せる
- ⑤生涯独身の心づもりをする

の5つの選択肢から1つを選択してもらいました。その結果、「自由の制約」のイメージが強い男女は、「⑤生涯独身の心づもりをする」の平均値が高くなる傾向が出ています。

また、男女とも「紹介や婚活で出会いを増やす」という積極派は3割程度と少数でした。特に女性は、年齢とともに「自然な出会いを待つ」「何もせず成り行きに任せる」「生涯独身の心づもりをする」という受け身の人がさらに増えることがわかりました。



※”1全く当てはまらない”から”7よく当てはまる”までの7件法で尋ねた

昔は大切に育てられ世間知らずで交際経験もない“箱入り娘”は、適齢期になれば周囲のお膳立てで、自然に結婚ができました。しかし、現代の箱入り娘は箱から出してくれる人がおらず、結婚するには、自ら出ていかなければならなくなったのです。異性交際にも消極的なまま30代になり、「自然に結婚できると思っていたのに、こんなはずではなかった…」ということが起きています。

これは、結婚が恋愛結婚になり、周囲の大人が干渉しなくなった一方で、恋愛や性をリードするのは男性というジェンダーが変化していない、という捨れがあるためだと思います。つまり、恋愛や性については慎ましい女性が望ましい、という考え方がまだある一方で、結婚するには恋愛が必要になり、積極的に異性に近づく必要が生じたのです。

男性の場合はアイデンティティの問題が絡んでいます。男性にとってアイデンティティの中心は仕事、経済的責任は主に男性にあるという考え方の男性は今も多いため、経済的にも心理的にも余裕ができてから結婚しようとするのです。

◆「自由の制約」が、結婚だけでなく家族形成も遠ざけている

ところで、どのような人が「自由の制約」を強く感じるのでしょうか。今回の調査では、自分と周囲との関係のとらえ方

の違いを分析しました。自分と周囲の関係のとらえ方は大きく2つに分けられます。1つは、自分の考えや行動は周囲の人の期待に関係なく自分で決めるのが当然だという個人主義的思考です。

もう一方は、自分の考えや行動は周囲の人が自分に期待することも考え合わせて決めるのが当然だという考え方です。日本や韓国では、後者の考え方が優勢です。これはもちろん結婚後の関係性にも当てはまります。晩婚化で、独身生活を長く謳歌している人にとって、これはかなり制約を感じるようになるでしょう。結婚すると、大変なことの方が多いのだ、と悲観的に考える背景には、このような事情もありました。

つまりここにも、自分の経済や時間を、誰に気兼ねすることもなく自由に使えるという個人主義的なライフスタイルという社会の変化の一方で、人間関係についての暗黙のルールは昔のままという捨れがあるとと言えます。

家族は、個人が環境に適応して幸せに生きるために、人類が考えだしたものです。だから、人々の住む文化により、あるいは時代により、適応すべき環境が変われば、そのための家族の形も変わることになるのです。これまで見てきたように、社会と家族のありかたの間に捨れがあると、「結婚は幸せより大変さの方が多い」ということになるのだと思います。

最近結婚した卒業生たちの話を聞いて驚いたことがあります。それは、家賃はもちろん食費も光熱費も含め生活費全てを割り勘にしている、結婚前と何も変わらない、その方が楽、という意見です。お父さんのお小遣いはいくらか、という話題とはもはや異次元です。結婚しても個人と個人、そういう個人主義的な結婚観を持つ人の方が結婚しやすいのかもしれませんが、つまり、個人主義的になりつつある文化で育った若者にとっては、結婚してもしなくても私は私なのでしょう。だから、結婚で自分を変えたくない、今のままでいられるなら結婚してもいい、と考える人が増えたのだと思います。

私たちの心の発達、文化や経済といった、私たちが生活する社会状況と密接に関係しています。社会が変われば、それに伴い家族のあり方も、私たちの心も変わります。でも、それらの変化にはタイムラグがあるのです。社会生活を送る上で「大変なこと」は、いつか、「大変ではない」やり方に変えようとするでしょう。晩婚化や未婚化は、そのような変化のプロセスなのではないかと思えます。

<文京学院大学について>

建学の精神「自立と共生」のもと、先進的な教育環境を整備し、東京都文京区、埼玉県ふじみ野市にキャンパスを置いています。外国語学部、経営学部、人間学部、保健医療技術学部、大学院に約5,000人の学生が在籍し、学問に加え、留学や資格取得、インターンシップなど学生の社会人基礎力を高める多彩な教育を地域と連携しながら実践しています。本レターでは本学教員陣の最先端の研究から、社会に還元すべき情報を「文京学院大学オピニオン」として提言します。

<文京学院大学 過去のオピニオンレター> https://www.bgu.ac.jp/about/activity/opinion_letter/